

小学校外国語活動における コミュニケーションの対象を広げた言語活動 ～ Youは何が好む日本へ? の実践を通して～

はじめに

3年生の外国語活動では、これまで、自分のことを伝えたり、友だちのことを尋ねたりする言語活動を通して、英語によるやり取りの楽しさを感じる経験を積み重ねてきた。その中で、「児童が英語を使いたくなるような目的・場面を設定すること」、また「英語でのやり取りを通して自分を再発信したり、相手を再認識したりすることのできる場の設定」を大切にしてきた。しかし、言語活動の相手が「友だち」に限定されている場合、活動が形式的になりやすく、英語を使う必然性や目的意識が弱まる場面も見られた。学年末を迎える今、これまでに身に付けてきた表現や経験を、より実感を伴ったコミュニケーションへとつなげる必要があるのではないかと考え、本実践を行った。

本実践のねらいと価値

本実践は、Let's Try! Unit5 "What do you like?" にあたる。日本語と英語の音声の違いに気付き、"What do you like?" を中心とした表現に慣れ親しみながら、好きなものについて尋ねたり答えたりするコミュニケーション活動を通して、相手に伝わるよう工夫しながら伝え合おうとする態度を育成することが目標である。そこで、本実践では、これまで友だち同士を対象として行ってきた言語活動の相手を、外国人観光客へと広げようとした。学級内に限定されたコミュニケーションから一歩踏み出し、実社会に存在する「初対面の相手」と関わる場を設定することで、児童にとって英語を使う目的や意味をより明確にしようと考えた。外国人観光客との関わりは、児童にとって予測が難しく、相手の反応も多様である。そのような状況の中で児童は、これまで学習してきた英語表現をそのまま再現するのではなく、「どうすれば伝わるだろう」「相手は何を知りたいだろう」「もう一度言い直してみよう」といった思考を働かせながらコミュニケーションを回ろうとすることが期待される。つまり、英語を「言う活動」から、「伝えようとする活動」へと学びを転換することをねらいとした。また、実際に英語を用いて初対面の相手と関わる経験は、児童にとって大きな挑戦であると同時に、自分の英語が相手に伝わった喜びや、相手の言葉を理解できた達成感を伴う学習機会となる。教室内では得難い「本物のコミュニケーション経験」を通して、児童が英語を使って人とつながる楽しさを実感し、「英語で伝えたい」「もっと分かり合いたい」という内発的な学習意欲を高めることにつながると考えた。

「問い」から英語使用の必然性・目的意識を生む

では、外国人観光客に何をインタビューするのか。必然性・目的意識をより生じさせるため、単元中盤に、「日本の観光に関する資料(訪日外国人旅行者数や再訪意向率)」を提示した。日本の訪日外国人旅行者数は世界ランキング15位である(2023)。しかし、再訪意向率では堂々の1位を獲得している。その差を児童に気付かせ、「なぜ日本は再び訪れたいと思われるのか」という問いを投げかけた。この問いを起点として「日本のどのような点が魅力なのか・外国人観光客は日本の何を好んでいるのか」というさらなる疑問を児童にもたせ、それらを予想し「実際に英語で尋ねてみたい!」「自分の予想があっているのか確かめてみたい!」という目的意識をもちながら、インタビュー内容の準備・インタビュー本番へと繋げていった。

授業の実際

第1時

歌やゲーム、ジェスチャー等を通して英語での食べ物の英語表現に繰り返し触れ、音声への慣れ親しみを図った。単なる語彙習得にとどまらず、日本語との音の違いにも気付かせながら、既習表現 "I like ○○." を用いて自分の好みを伝えることも行った。単元終末の外国人とのコミュニケーション活動を見据え言語使用への期待感を高めた。

音声への慣れ親しみ

第2時

第1時で学習した語彙・表現を用い、友だちを対象とした「好きなものインタビュー」を実施した。「fruit」「food」などのカテゴリを設定し、「What ○○ do you like?」「I like ○○.」のやり取りを行った。終末活動でコミュニケーションの相手を広げようという意図を、身近な相手から段階的に活動を構成するスモールステップとして位置付けた。

身近な他者との対話

第3時

同じ表現構造を維持したまま、カテゴリを「school lunch」に変更し、再度インタビュー活動を実施した。カテゴリを変えて新たなコミュニケーションが生まれることを体験させ、表現の汎用性への気付きを促した。友だち同士のやり取りを継続することで、安心感の中で発話量を増やしたり、語彙の難易度を上げたりした。

表現の転用と運用

第4時

先述した問いを踏まえ、外国人観光客へのインタビュー活動に向け、日本文化に関する内容を子ども自身が予想・選択した。「日本料理」「アニメ」「季節」「観光名所」「ラーメン」「漫画」「コンビニ」など複数のカテゴリを設定し、「What ○○ do you like?」を用いた質問づくりと情報収集を行いながら、インタビューの準備を進めた。

問いからの質問づくり

第5時

グループで準備してきた外国人観光客へのインタビュー活動に向けて、既習表現の想起と実践的なやり取りの改善をねらいとした。学級の中で、観光客役とインタビュアーに分かれてインタビュー活動を行った。授業の最後に活動を振り返り、よりよいインタビューの方法を考え、次時への課題を明確にした。

真正性を高めるシミュレーション

第6時・第7時

インタビュー内容を改善し、実際に大阪城公園にて外国人観光客へインタビュー実施。

内容の再検討と改善

実社会でのインタビュー活動

成果 ～児童の姿の変容から～

本実践を通して、児童のコミュニケーションに対する姿には大きな変化が見られた。相手が外国人観光客になることで、決まった表現をそのまま使うだけではなく、自分の伝えたいことを自分の言葉で伝えるにはどうしたらよいかと考える姿が見られるようになった。具体的には、質問の仕方を工夫したり、ジェスチャーを交えたりしながら、「どうすれば伝わるか」を考える様子が生まれていったのである。英語を話すことが単なる「授業活動」ではなく、「相手とつながるための手段」として捉えられるようになった点も大きな変容であると考えられる。

Before ～これまでの実践～	After ～本実践～
言語活動の相手は友だち	言語活動の相手は外国人観光客
決まった表現でやり取り	自分の言葉でもやり取り
授業として話す	伝えるために話す
外国語=授業内で使用する言語	外国語=つながる手段

～小道具の活用～

実際の街頭インタビューの状況に、より似せるために、マイクやシルルボードを活用した。マイクを手にするだけで自然とインタビュアーとしての意識が高まり、児童は声の大きさや話す速さ、相手の方に向けて話す姿勢などを自分なりに工夫しようとする姿が見られた。また、シルルボードを用いることで、質問内容を相手に示しながら伝えようとする様子が見られ、言葉だけに頼らず相手に分かりやすく伝えようとする意識が見られた。

おわりに

今後は、本実践で得られた成果を生かし、実社会と結び付いた言語活動を単発的な取り組みで終わらせるのではなく、学習の中に継続的・段階的に位置付けていくことが重要であると考えられる。教室内でのやり取りから始まり、身近な人との交流、そして社会とのコミュニケーションへと学びを広げていくことで、児童が英語を使う意味や価値をより実感できるようになると期待される。特に、実際の人と関わる経験を通して、児童が「英語を使うと人とつながることができる」と感じることで、英語学習への意欲を高めることのできる授業内の言語活動を今後も研究していきたい。